

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 1章3～14節

³わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。⁴天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。⁵イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。⁶神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。⁷わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。⁸神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、⁹秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。¹⁰こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。¹¹キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。¹²それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。¹³あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。¹⁴この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 11章25～30節

²⁵そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。²⁶そうです、父よ、これは御心に適うことでした。²⁷すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかには子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。

²⁸疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。²⁹わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。³⁰わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

キリストのもとに一つ！

今年も、6月第2日曜日「花の日・こどもの日」にあわせて、この時間の礼拝に教会学校の子どもたちを招いて、教会全体で共に「合同礼拝」をささげることになりました。普段の教会学校と時間が違いますから、子どもたちがどれくらい出席してくれるだろうかと少し心配でしたが、どうでしょうか。

「花の日」は、160年ほど前、アメリカのある教会で始まりました。いつもは大人中心、大人優先で考えられている礼拝の中心に、子どもたちを迎えて、子どもたちを中心に礼拝をささげよう。そのために、子どもたちに喜んでもらえる綺麗な花で礼拝堂を飾ろう。そう考えて一つの教会で始められた行事が、すぐにアメリカ中の多くの教会で持たれるようになりました。そして、アメリカから来た宣教師たちが日本の教会にも伝えて、「花の日」として毎年行事が行われるようになったのです。最近では、「花の日」は本来は子どもたちのための礼拝をした日だからということで、「こどもの日」とも呼ばれるようになりました。

わたしたちの石神井教会では、普段、高校生までの子どもの多くは、9時からの教会学校礼拝に出席しています。そして、大人の多くは、この時間の主日礼拝に出席しています。大人の皆さんには、いつも、「9時からの教会学校礼拝においでください」とご案内していますが、いらっしゃる方は少ないようです。逆に、子どもたちは、この時間の主日礼拝は「大人の礼拝」だと思っている人もいます。なかなか出てみようと思えないところがあるかもしれません。

けれども、教会で日曜日におこなわれる礼拝は、本当は、どの礼拝も、だれが出席してもよいものなのです。教会に「大人の礼拝」と「子どもの礼拝」があるわけではありません。主イエスの弟子たちは、主イエスの教えを聞きに大勢が集まってきたところに、ある人たちが子どもたちを連れてきたとき、叱って、子どもたちを遠ざけようとしたことがありましたが、主イエスは、逆に弟子たちを叱って、おっしゃったのです。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである」(マタイ19:14)。主イエスは、今日の福音書の中でも、「**だれでもわたしのもとに来なさい**」とおっしゃられていますし、使徒パウロは、手紙の中で、「**あらゆるものが…キリストのもとに一つにまとめられる**」と言っています。そればかりか、主イエスは、福音書の中では、神が御心を**幼子のような者にお示し**になるともおっしゃられているのです。神の御心を本当に知るようになるためには、教会の中心に、幼子、子どもがいることが必要だ、ということでしょう。

大人は、どうしても自分たち中心に何でも考えがちです。子どももそうかもしれませんが、そう思っても、何でも自分たち中心にはできないでしょう。大人は、それができてしまうので、子どもたちを後回しにしてしまうことがあるのです。そこで、教会が子どもたち中心の礼拝や活動をいつもするようにと、教会学校の礼拝や活動があります。でも、本当は、全部の礼拝や活動が、子どもたちのことをいつでも中心に迎えられるものであるようにするのが、主イエスの御心なのだと思います。「合同礼拝」は、そのことを忘れないために、しているのです。

「神の子」の教会

そういう教会の姿を、「神の家族」と言い表すことがあります。神を真の御父とする「家族」です。その家族に属するのは、「神の子」たちです。教会に集められてくる人たちは、大人も子どもも皆、「神の子」になるために集められてきているのです。

ただ、わたしたちは、神のことを真の御父として最初から知っているわけではありません。たぶん、皆さんの中に、誰かに教会に連れて来られる前から、「自分は神の子だ」と分かっていた人は、ほとんどいないと思います。人間は、自分を生み、育ててくれている親を父とか母として知っていても、見えない神が「真の御父」だとは、分かっているものなのです。

ところが、「神が真の御父で、自分は神の子だ」と、はっきりわかっている方がいらっしやったのです。主イエスです。主イエスは、神を「天の御父」とお呼びして、血のつながった親子以上に深いつながりを、天の御父と結ばれていらしたのです。主イエスは、「自分は神の子だ」と宣伝して回ったわけではありませんが、そのお姿を見続けた弟子たちは、主イエスこそ「本当に神の子」だと、「神の愛する御子」だと、信じるようになりました。

主イエスが「本当に神の御子」だというのは、すばらしいことです。天の御父と深いつながりで結ばれた「神の御子」を、わたしたちは、人間の姿をされた方として見るができるからです。二千年経った今も、聖書の伝えることを通して、その「神の御子」である主イエスのことを、わたしたちは、知ることができるのですから、それはすばらしいことです。

でも、もっとすばらしいことがあるのです。それは、主イエスが、ご自分を通して、弟子たちやわたしたちのことも「神の子」としてくださった、ということです。主イエスは、人間として生き、そして死なれた方でしたから、弟子たちは、その言葉や行いを、そのまま見聞きすることができました。主イエスは、弟子たちに、ご自分の御言葉をお教えくださり、御業を示して同じように行うようにと言われました。主イエスの御言葉と行いは、弟子たちが受け継ぐことができるようなものだったのです。そして、その弟子たちにも、神が直接働きかけてくださって、つまり聖霊をお与えくださって、「神の子」として天の御父と結ばれるということ、主イエスは約束くださったのです。

皆さんは、「父と子と聖霊」という言葉を知っていますか。天の御父である神、御子イエス・キリスト、そして聖霊、です。難しい言葉で「三位一体」と言ったりしますが、大切なことは、それが、主イエスを通してわたしたちも神の子にさせていただけるということを表す言葉だ、ということです。それで、教会では、「父と子と聖霊」という言葉を忘れないように、心がけています。ある人たちは、「父と子と聖霊」と唱えながら十字を切る、という習慣を持ち続けています。そうしなくても、わたしたちは、色々な場面で、「父と子と聖霊」を思い起こすようにしているのです。実は、礼拝の最初に歌った「聖なる、聖なる、聖なる主よ」の讃美歌も、「父と子と聖霊」をおぼえて神をほめたたえる歌なのです。

「聖なる、聖なる、聖なる」と歌うところから世界へ！

「聖なる、聖なる、聖なる主よ」。そのような言葉で神をほめたたえる讃美歌は、実は、あの讃美歌だけでなく、たくさんあります。昔から教会で大切に歌われてきた讃美の言葉なのです。今でも、多くの教会では、礼拝のときに必ず、「聖なる、聖なる、聖なる主よ」の言葉を含む讃美歌を歌っています。とても美しい言葉ですから、そのような讃美歌を、わたしたちもいつでも歌ってよいのです。というのは、実は、この「聖なる、聖なる、聖なる主よ」という讃美は、聖書の中にある言葉だからです。しかも、天上の礼拝で歌う天使の讃美の言葉なのです。

それを、天上で礼拝する天使の讃美の言葉として聞いたのは、旧約の預言者イザヤでした。イザヤは、あるとき礼拝をささげていると、幻を見ました。セラフィムと呼ばれる天使が二つ、空を飛び交いながら、互いに呼び交わし、歌っていたのです。「**聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う**」（イザヤ 6:3）。ほとんど同じ幻を、新約のヨハネ黙示録でも、弟子のヨハネが見たと伝えています。その天使の歌う讃美を、教会では、人間が歌うのです。いいえ、「神の子」らがこの讃美を歌っているのです。

天使の讃美を歌う「神の子」の教会。それが、今、わたしたちが集められているところです。教会は、本当に主イエスが「神の子」で、わたしたちのことを「神の子」として生きるようにしてくださるのだと、すべての人が分かるようになってほしいと願って、礼拝を整え、活動をするところなのです。世界中のすべての人が「神の子」として生きるようになってほしい、全世界の人がお互いを「神の家族」の一人として認め合って、尊重し合って、仕え合って生きるようになってほしい。そう祈り、その祈りを形にしているのが、教会なのです。

その教会に、皆さんが加わってほしいと願っています。ここに今いない人も含めて、誰もが礼拝に加わってほしいのです。それは、主イエスのお招きに応じて、主イエスに従っていく、主イエスと共に生きていく、ということです。主イエスこそ、わたしたちがなろうとしている「神の子」の長子なのです。そのような生き方を始めるしるしとして、わたしたちは洗礼を受けました。もちろん、ここには、まだ洗礼を受けていない人もいます。洗礼を受けた者も、まだ受けていない人も、教会の礼拝や活動に加わることはできます。また、受けるかどうかは、神がお決めくださることです。でも、わたしたちは、皆が同じように洗礼を受けてほしいと願っています。それが、「聖なる、聖なる、聖なる」と歌い、「父と子と聖霊」をおぼえて、共に「神の子」として生きる教会に、主イエスがお命じになられたことだからです。

主イエスは、弟子たちに、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに銘じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタイ 28:19~20）と命じられました。その主イエスは、ご自分のもとに来なさいとお招きくださった者と、いつも、いつまでも、またどこまでも、共に軛を負い、共にいてくださるのです。

教会に集められた「神の子」の皆さん。さあ、主イエスと共に行きましょう。